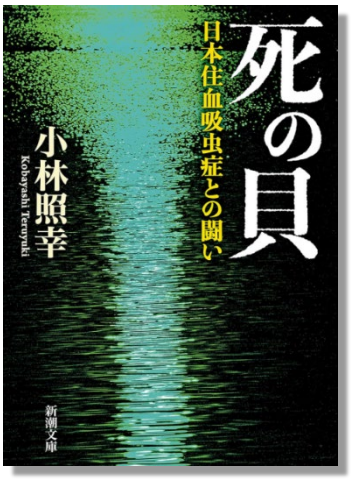
ブックガイド　気楽に読んで査定力アップ！（128）

―Wikipediaで温故知新―

死の貝　日本住血吸虫症との闘い

小林照幸 著

新潮文庫 税込定価737円 2024年5月刊行



気楽に読める一般向けの本で、アンダーライティングに役立つ最新知識をゲットしよう。そんなコンセプトのブックガイドです。第128回のテーマは「日本住血吸虫」。今さら寄生虫、という感じもありますが、最近になって文庫化されたので紹介しましょう。

Wikipedia3大文学というものをご存知でしょうか。Wikipediaのノンフィクション事件記事で、読み始めると思わず引き込まれてしまう秀逸なものとして①八甲田雪中行軍遭難事件、②三毛別羆（ひぐま）事件、そして③地方病（日本住血吸虫症）の3つらしいです。その中でも地方病（日本住血吸虫症）のWikipediaは質・量ともに抜群の出来栄えです。ぜひリンクをたどって読んで見てください。

この3大文学のうち①②は皆さんご存知のように①新田次郎「八甲田山死の彷徨」、②吉村昭「羆嵐（くまあらし）」と著明な作家によって書籍化されています。③も1998年（平成10年）に小林照幸氏によって「死の貝」というタイトルで刊行されました。その「死の貝」が2024年5月になって文庫化されたということになります。

現在ではほぼ鎮圧された日本住血吸虫症ですが、世界ではまだまだ猛威をふるっているところもありますし、国内でもインバウンド増加や途上国から仕事をしに来る人の増加にともなっていつまた復活するかわからない状態です。ですから、保険会社にとっても国内のリスクであるとともに、途上国に進出する場合にもまだまだ現地の寄生虫疾患を無視できないという現実があるわけです。アンダーライティングの仕事の上では知っておいて損はないですね。

さて、日本住血吸虫とは？江戸時代以前から、今の山梨県、広島県、福岡県と佐賀県（筑紫川流域）では、稲作農家を中心に田んぼで働く世代がかかる風土病がありました。山梨では「水腫膨満」、広島では片山川にちなんで「片山病」、筑紫川流域では「まんぷくりん」などとよばれており、腹水がたまり栄養状態が低下し肝硬変で死んでしまいます。

明治になって西洋医学の時代になり、西洋医学そのものも顕微鏡の発達で病気の原因となるさまざまな病原体が発見される時代になりました。多くの細菌感染症は原因菌がわかったものの、その根絶は第二次世界大戦前後の抗生物質の登場を待つ必要がありました。一方で、寄生虫感染症は細菌と違い観察しやすいこともあって独特の歴史と闘いがありました。

明治になって山梨の「水腫膨満」での死者を解剖するようになり「水腫膨満」の原因が未発見の寄生虫が原因であることがわかり日本住血吸虫と名付けられました。寄生虫の感染経路は経口、つ

まり食べ物と一緒に体内にはいるものが大多数です。日本住血吸虫も経口感染を疑い調理加熱などで対策しましたが患者は一向に減りません。

そこから研究者たちのさまざまな試行錯誤がありました。その中で、1913年に大きなパラダイムチェンジとなる発見をしたのが九州大学の衛生学教授・宮入慶之助先生でした。宮入先生が筑後川で発見した「宮入貝（ミヤイリガイ）」という大きさ数ミリの巻貝が日本住血吸虫症感染のキーポイントだったのです。

ヒトなどの感染動物の糞便と一緒に排出された寄生虫の卵は田んぼの中で孵化して「ミラシジウム」という生態になるんです。ところが、このミラシジウムが直接人間に感染するわけではないのがポイントでした。ミラシジウムは田んぼの中でミヤイリガイの中に入りそこで大増殖と変態をとげます。1個のミラシジウムから5000個にもおよぶ人間への感染力をもった「セルカリア」という虫体になり水中に放出されます。セルカリアは田んぼの水中にひそみ、露出された人間や牛の脚の皮膚から体内に侵入。体内で肝臓に運ばれそこでオスとメスが出会って繁殖するのです。

このあたり、Wikipediaではそれぞれの解明のステップを図も交えてわかりやすくに解説されていますからぜひ一読してください。その解明プロセスはとても勉強になります。ミヤイリガイという中間宿主がいるかぎり感染の環を断ち切ることはできないことがわかったのです。そしてミヤイリガイの駆除によって日本住血吸虫症も根絶へと向かいました。

寄生虫は日本住血吸虫とは名付けられましたが、この寄生虫は中国でも古代のミイラからも発見されており、揚子江流域の感染拡大は日本の比ではなかったようです。中華人民共和国成立後に日本人医師が協力しての撲滅活動など興味深い話も盛り込まれています。

その後、1979年に日本住血吸虫に対する経口での特効薬プラジカンテル（商品名ビルトリシド）が開発され今にいたります。ただし特効薬があるといっても、診断がつかなければ投薬にいたらないわけなので、そうした複雑な生態の寄生虫が存在することを忘れるわけにはいかないということです。

私の母校の医学部構内の通りには著名な先輩の名前がつけられているのですが、メインストリートの名前は「宮入（みやいり）通り」といい、並木のきれいな通りです。もちろん宮入慶之助先生の名前をとったものです。寄生虫という古いテーマをWikipediaで学びなおし、自分自身の学生時代の思い出にまでつながりました！（元査定職人　ホンタナ　Dr. Fontana　2024年9月）